

## みんなから素直に学べる人に、自分で考える人に

### 三度目の正直

娘が小学校に入学し、九カ月がたつ。最初は授業や宿題に戸惑っていたが、すぐに慣れて、毎日笑顔で通学している。日記や作文に四苦八苦し、計算カードの一分以内ができず、泣きながら頑張っていた。その分、達成した時は大喜びしている。共働きのため、丁寧に勉強をみたり、ゆっくり子供と過ごしたりする時間が持たず、申し訳なく思うこともある。しかし、娘は放課後の預かり教室や祖父母と過ごす時間を楽しんでいる。畑で野菜を収穫し、自然の中で遊んで、四季折々の美しさを感じているようだ。

私が好きな絵本に、五味太郎の「みんながおしえてくれました」という本がある。「あるきかたは、ねこがおしえてくれました」とびこえかたは、いぬがおしえてくれました」と女の子がいろいろな動物から教わる。そして「わたしは、うまれつきかんがえるひとだし、いろいろおぼえるひとでもあるし」と女の子が一人で考える場面になる。さらに学校には「いろいろこまかいことをおしえてくださる」先生達がいってくれる。最後に「なにしろともだちがたくさんおりますから、どうみてもりっぱなひとになるわけです」と女の子が多くの子の笑顔と手をつないでいる場面が終わる。最後の頁に描かれた、自信満々の女の子の笑顔が素敵だ。

周りのみんなが先生。自然の中からもたくさん学んで、分らないことはどんどん質問しよう。友達と仲良く、切磋琢磨して、共に成長しよう。これから困難なこともあるだろうが、自分で考えて、乗り越えてほしい。一生、学び続けてほしい。健やかに成長し、人生を楽しんでほしい。そう願っている。

九月、娘が腕を骨折した。学校から電話をいただいて、かけつけると、娘の右前腕が、普通ではない方向に反り返っていた。「またか。」心の中で思った。実は、娘が骨折したのは、初めてではない。今回で、三度目なのだ。一度目は、二年前、階段から落ちて、頭部と顔を骨折し、二度目は、一年前、鉄棒から落ちて、今回と同じところを骨折している。見事に、一年と三カ月毎に、事件が起きてしまう。娘は、残念ながら、運動は好きなのが、私に似て運動音痴なのである。

今回、かけつけた際には、先生方から、「痛いのには、全然泣かなかったんですよ。」

と、言ってくれた。小学生になって強くなったなあと、思っていたが、やはり、車にのつてから、病院の待合室でも、ずっと泣いていた。手術が終わり、麻酔が切れて、夜中に激痛が襲い、痛み止めが効かないほどの痛みに耐えていることに、代わってあげることでできないもどかしさを感じながら、ずっと腕や背中をさすり一緒に泣いていた。

痛みや、手術に耐えて、左手での不自由な生活にがんばりぬいた娘をほめてあげたいと思う。

今回の怪我で、学校では、先生方をはじめ、周りのお友達がともよく、お世話や協力をしてくださり、娘の学校生活を支えてくださった。娘共々、感謝の気持ちでいっぱいである。

今年の冬、どうかもう怪我をしませんように、これが三度目の正直で終わってくれますようにと、心から祈っている。

## 英語コミュニケーション

## 十年後の息子へ

今年も英検の時期がやってきた。思い返すと私が初めて英検を受けたのは中学一年の時だった。その頃は、本格的に英語学習が始まるのは中学校だった。息子たちは、文理幼稚園、小学校と早くから英語に親しみ学ぶ機会を頂き有り難く思う。

私の中学時代、英語で授業をしてくださる日本人の先生と数週に一度来てくださるアメリカ人の先生の緊張感ある新鮮な授業が楽しみだった。その後も英語は好きな教科で、社会人になっても英文を読む機会は多かったが、英会話に関しては避けてきた。苦手意識が強かった。そんな私に、主人の仕事の関係でスウェーデンで暮らす機会が巡ってきたのは四年前のことだ。公用語はスウェーデン語、渡航前の短期間に習得できるはずもなく、頼りは避けてきた英会話のみで、幼い息子を連れて不安一杯だった。

移住先はスウェーデン最南部のマルメという都市だった。地理的にはデンマークの首都コペンハーゲンと海峡をはさんで隣り合っておりエーレスンド橋でつながっている。移民が多く、小学校ではスウェーデン語と英語に加え各人の母国語の授業も選択でき、若い世代の多くは、三、四カ国を話すことができた。皆それぞれ別の訛りのある英語で穏やかなスピードなので私には有り難かったが、この渡航を機に英会話のコミュニケーションツールとしての有用性をさらに強く感じるようになった。

日本でも学習指導要領改訂により英語コミュニケーションに今後さらに重点が置かれる。国際社会にある子供達には、日本文化の理解と共に、抵抗なく身につけてくれることを願っている。

将棋の藤井聡太四段が達成した公式戦二十九連勝。若干十四歳の大記録に昨夏、日本列島は沸いた。我が家でも将棋セットを購入。息子も興味を示すようになった。その陰で将棋界では「黒船の襲来」ともいべきショックな出来事が起きた。それは佐藤天彦名人が人工知能(AI)に敗北するというものだった。

AIの産業への活用については「第四次産業革命」と呼ばれることも多く、すでに実用化の動きも出ている。東京大学医科学研究所は、AIを備えるコンピューターが専門家でも診断が難しい特殊な疾患をわずか十分で突き止め患者の命が救われたと発表。野村総研では、十、二十年後には日本の労働人口の約四十九%が技術的にはAIやロボット等で代替え可能になると予測している。

将棋の指し手の研究にAIを活用しているという藤井四段は、AI台頭時代について「コンピューターの方が強くなった時、棋士の存在意義が問われてくると感じます。」と語っている。近い将来、社会の構造は大きく様変わりしているかもしれない。ただ、その時代を不安を持って迎えるのではなく、息子には希望を持って臨んでもらいたい。その為には「どんな仕事が残っているか」ではなく、「どんな新しい仕事が生み出せるか。皆に喜んでもらうにはどうすればいいか。」という発想を持ち続けることこそが、大切なのではないか。

十年後、息子は大学受験を迎える。この学び舎で過ごす十年の間に、社会で存在意義を発揮するのに必要なことを身に付けて、一人でも多くの仲間を見つけて欲しい。そう願っている。

## 共に学ぶ旅

「さて、問題です。」

今日もクイズ大会が始まった。三年生の次男は大のクイズ好き。保育園の頃から、家族に出題するようになった。ジャンルは様々で、ある時は大好きな電車、飛行機のこと、または動物や植物についてなど。小さい頃の問題はとも簡単であり、即答できた。いつも三択問題なのだが、概ね正解は一番目。そうでなくても正解以外はぎこちない言い方になるため、たまに私の知らない内容が出て解答でき、正答率はほぼ百パーセントだった。

しかし最近はその状況が変わってきた。

「ブブー、はい残念でした。」

と得意気に言われてしまうことが多くなった。敗因は出題ジャンルだ。次男の興味は今、戦国武将と城となっている。戦国時代に興味がなかった私にとって、教科書に登場しないような武将が、どの戦でどの武将と戦い勝利したかなんてのは超難問。その上、どこにある誰の城だったかなどはもう未知の世界である。また選択肢も巧みになり、ひっかけ問題を入れ込んでくる。文理小の先生の御指導のたまものだと感謝している。

すいすいと解答する夫を見ながら、私も知識をつけたいと思い、最近の家族旅行の主流は城めぐりとなっている。古戦場にはまだ踏み込めないが、子供達と共に城攻めをし、城の造りや特徴を学習しながら、武将気分を楽しんでいる。今春は念願の姫路城に行く予定だ。うんちくをたくさん語り、得意気な顔をした子供達を想像し、今からわくわくしている母である。

## 出会いを通して

仕事を通して新たな出会いがあった。一組目は、大阪と愛知から来た地域おこし協力隊の二人。二組目は、横浜から家族で移住してきて、秋に念願のパン店を開店させたご夫婦。県外から徳島を選んで移住してきた方なら、我々の気づかない徳島のすばらしいところや魅力を語ってくれるのではないかとということで取材をお願いしたところ、快く引き受けてくださった方々である。

大阪から来た地域おこし協力隊員は、大阪でのサラリーマン生活を振り返りながら、徳島には美しい自然や人々のつながりがあり、それらによってお金では買えない心の豊かさを得ることができたと言った。愛知から来た隊員は、ホテルマンになるという幼い頃からの夢が叶った直後、たまたま参加した地域おこし協力隊員の活動報告会で聞いた先輩隊員の話に感動し、自分も地域おこし協力隊員を志したと言う。そして、実際に地域おこし協力隊員として活動する中で、地域から必要とされていることを感じ、充実した日々を送っていると言う。また、横浜から来た夫婦は、徳島米はおいしく、本場新潟にもファンがいることや、きれいな水や空気を利用して作られる徳島野菜は県外の人にも人気があることを語り、徳島には地元の人々が気づかない宝物がたくさんあることを教えてくれた。あたりまえすぎて気づかないだけだと言った。今回の出会いを通して、私自身が古里徳島を見つめ直すことができた。また、あたりまえすぎて気づかなかったものの価値を考え直し、それらに感謝する気持ちも生まれた。これからもその気持ち忘れずに、古里徳島を誇りに思いながら生きていきたい。

## 沈黙は金？

「内弁慶」や「外面が良い」という言葉に象徴されるように、どうやら家庭の中と外で態度や人格が異なるのはよくあることのようにです。

かく言う私自身も、外ではどこに行っても多弁な方で通っていますが、家庭内では口数がめっきり少なくなっています。知り合いにそんな話をするときと驚かれることも多々ありますが、れっきとした事実です。ただこのように言うときと家庭内の不和など疑われそうですが、そういうことでもないのです。

我が家は私たち夫婦と長女、長男の四人家族です。毎日仕事を終えて家に戻ると、まず長男が駆け寄ってきます。私が部屋着に着替えるのを待たず、その日幼稚園であったことなどを引切り無しに話してくれます。長男の話に相槌を打ちながら着替えを済ませてリビングに向かうと、今度は長女と家内が一斉に口を開きます。会話の流れはさらに加速度的に勢いを増し、皆が床に就くまでその波が止むことはありません。

そう、本来多弁なはずの私は何かを意図して無口になるのではなく、私以上に多弁で雄弁な三人の論客を前にしてそうならざるを得ないので。家庭内において、私は聞き役に回るといふ術を身につけたのでした。

家庭内のコミュニケーション不足が度々話題になる昨今ですが、今のところどうやら我が家ではその心配はなさそうです。これから先、子供たちが成長してもなお会話と笑いの絶えない家庭であり続けたいと願う次第です。

## AI時代の子育てについて思うこと

「二〇一一年度アメリカの小学校に入学した子供たちの六十五％は、大学卒業時に今は存在していない職業に就くだろう」（ニューヨーク市立大学教授 キヤシー・デビッドソン氏）という文科省の資料に掲載された文章が、「二〇二〇年の入試改革とこれからの子供たちが求められる力について」という講演で引用されたそうです。昨年、iPhone Xが発売され、ちょうどiPhone登場から、十年経過して世界は劇的に変化しました。今や子供たちはスマホやPCを大人以上に使いこなし、インターネット通信で、自宅にいる友人と一緒に将棋やテレビゲームが遊べる時代になりました。私が学生時代に、携帯電話が開始（今では考えられない厚みと大きさがありました）研修医時代に病院からの緊急呼び出しはポケベルという時代でした。先日子供が、当時のポケベルを見つけて、「パパ何この機械？ 電話できるの」や「今は使っていない昔の携帯電話の画面をタッチして作動しないと、これ壊れているの？」と聞く様子が、当たり前の感覚の違いを感じました。オックスフォード大学でAI（人工知能）の研究を行うマイケル・A・オズボーン博士は、「今後十〜二十年程度で、アメリカの総雇用者の約四十七％の仕事が自動化されるリスクが高い」と言われているそうです。このような時代の到来を見据えて、私たちの過去の経験にとらわれず、将来を予測して、子供たちの目指すべき将来につき、親である私も柔軟に学び続ける必要があると思う今日この頃です。これからも、人間にしかない感性や繊細さ、思いやりなどを育む体験を沢山させてあげたいと考えています。

## 母の支え

今から十一年前、小さな赤子の娘を車の後部座席のベビーシートに乗せ、徳島空港まで母を迎えに行つたことを思い出す。手荷物を持ち、自動ドアから出てきた母は、後ろの座席に乗り込むやいなや、

「なすなちゃん、こんにちは。おばあちゃんよ。」と、嬉しそうに娘の顔を覗き込んだ。その様子に、私は「ああ、おばあちゃんかあ」と少し驚いてしまったことを覚えている。あの時、母はまだ四十代であった。

私たちが夫婦の仕事の都合で、娘の面倒を見てくれる人が必要だったこともあり、九州の母に徳島への移住をお願いしたのである。仕事に力を入れ、充実した日々を送っていた母にとって、徳島への移住は、苦しい決断だったに違いない。それでも娘である私のこと、孫のことを想い、大好きだった仕事を辞め、移住を決意してくれたのである。あれから、もう十二年が経とうとしている。四月には、娘は六年生になる。空港で母を迎えたあの日から、いろいろなことがあった。娘の成長する姿を共に喜んだり、娘の将来に共に悩んだり。時には、仕事の忙しさや子育ての難しさに、イライラする気持ちを激しくぶつけたこともある。それでも母は、私たち家族のことを支え続けてくれている。

要領が悪く、一度に二つのことなどこなせない私にとって、仕事と子育ての両立など不可能に近い。それでも、今の娘の成長があるのは、母の支えのお陰である。母も還暦を迎える年となった。でももうしばらくは、私たちが家族を支えていってほしいと願う。

## いい育児

我が子の育児は特に難しく思うようにいかない。だいぶん任せな私だが、他の子の育児に関わる仕事をしているからこそ余計気づかされる。一つの例に、「食べる」ことをできるように育てる」ということを挙げる。食べるは当たり前前にできるように思うが難しい機能で、最近問題を抱えている児も多い。食べる機能の初期の行動である離乳食。私は仕事柄、専門家としてそれなりの知識と意気込みで取り組んだと思う。けれど結果そううまくいかなかった。我が子の口は思うようにすんなり育っていない。

「姿勢正してあしつけてしつかりかんでちゃんと食べなさい！」となんとも難しいことを怒って言っても、一筋縄ではいかない。ずっと前からの積み重ねの結果なので今さらだ。生まれてからの授乳、呼吸、姿勢、ハイハイや身体を使った遊び：もちろん本来の要素もあるが様々なこれらの行動と発育の結果の機能なのだ。子どもが成長する程自分の乳幼児育児は浅かったなと感じる。私達の親世代の少し昔は、特にマニュアルや情報はなくても、自然と周りの人が口を出し、子どももみて真似をし覚え、いい意味注意をうけ早期の軌道修正を繰り返しながら習得していった。最近ではマニュアルに頼りがちで独自判断も多いのかもしれない。離乳食の失敗も然りだが一握り。子どもの行動変化に気づく目を持たず人の評価なくすすめてしまった。どの親も良かれと思って真剣に関わっていると思うが、客観的に捉える冷静さや、人の意見をうまく取り入れることが大切でいい育児なのかもしれない。今後もしも色々あると思うが周りの人に助けられ育てられていることを再認識し、親子共々あと一年小学校生活を楽しみたい。

## 我が子の成長

双子を含めた男の子三人が続いた我が家に、新たに授かった命は、家族みんなが待ち望んだ女の子でした。月日が過ぎるのは早いもので、瞬く間に十二年が過ぎました。

幼い頃はわんぱくなお兄ちゃん三人にいつも引っ付き、兄弟で一番真っ黒に日焼けしていた時もありました。どれだけやんちゃな女の子になるのかと一時は心配しておりましたが、就学の頃にはアイススケート、帰徳してからはローラースケートフィギュアに興味を持ち、段々と女の子らしくなってきました。今ではヘアアレンジメントも上手になり、自らお菓子作りに励むなど私顔負けの女子力を発揮するようになりました。娘から教えて貰う場面も見られるようになり、支えているつもりが、支えられていることも出てきたように思います。

武者小路実篤の言葉に、子供を見守る親として考えさせられる言葉がありました。

『人見るもよし 人見ざるもよし 我は咲くなり』  
時に私たちは他人の評価や世間の価値観に振り回されてしまうことがあります。自分たちの価値観を子供たちに押し付け過ぎないように注意しながら、子供たちの個性が充分花開くことができるように、もうしばらくは共に悩みつつ、付かず離れず人生を並走りたいと思います。

恵まれた学びの環境の下、吸収力のあるこの時期に、勉強だけでなく人間力に磨きをかけて、将来は自分達よりもしっかりと自立してくれる社会人になってくれることを願うばかりです。

## 子供達へ

数年前、同業である両親の職場を整理する機会があった。親が今の私よりも若かった当時に最先端であった書籍や書類。情報収集も書店や郵送の時代。タイピングされた文献にわら手紙もあった。今は電子化が進み、情報を得る手段も速度も保存方法も変化した。専門分野にしる社会的背景にしる、この時代があったからこそ今があるのだ。そこにはまさしく様々な分野の歴史が詰まっていた。私が幼児の時の日付の資料もあり、当時の私には見せなかつた過去の仕事人の親がそこにいた。書き込まれたメモを見て当時の親の姿勢を感じ取り、子として、また後輩として何かしら感慨深いものがあつた。根本的には今と何か通じることがある。見ること、知ること、探究すること。どの時代も、一社会人として求められる姿勢は同じなのだ。

今後子供達の成長とともに、様々な分野の常識も変わっていくかもしれない。時間は必ず経過し、今この瞬間はすぐに過去となる。逆に過去があるから今があり、そして自分の今の姿勢が自身の未来を導く。難しく考えず、ただ見て知りたいことを探求すればいい。「言うは易く行ふは難し」かもしれない。自分を振り返るような年齢になったからこそ言えることだろう。まずはただ、そこが暗闇であるのなら暗闇であるということを理解することだ。そこから手さぐりででもわずかな光を見つけたことです。自分なら、その先は自分次第でどんどん明るさが増していくだろう。自分なりのペースでいい。毎日頑張る子供達に、心からの感謝と賛辞、そして最大限のエールを送りたい。